

健康文化

## 父の日の結婚式

今井田 二三子

長い間お会いしていなかったY氏が突然訪ねられ玄関の前で顔を合わせると同時に「今度娘のuが結婚することになりまして、先生に出席して欲しいと言うものですので、実はお願いできるかどうか躊躇し家の前まで来ましたが二度は戻り今日は三度目です」と遠慮されながら告げられました。心の何処かでその日を待ち、もしかしたら招待されるのではないかという予感がしていた私は直ぐさま「喜んで出席させていただきます」と答えて、初めて客を家の中に招き入れるのを忘れていたのに気付きました。同時に私の頭の中のフィルムが約三十年を音をたてて巻き戻るのを感じました。前にも書きました初めて赴任したK病院で受け持った患者さんの一人に可愛い若い女の人があり、その人は牡丹の花のような華やいだ雰囲気を持ち暗い病室が急に花が咲いたように感じたのを覚えております。華やかな雰囲気のためでしょうか花に集まる蝶のようにいつも若い男女の見舞客があとをたたく、時には回診時に室外に出てもらったり、安静のため見舞客の帰りを促したり、その人の病気の詳細は今は全く浮かんできませんが見舞客に悩んだのが記憶の底に残っています。その中に静かな感じのY青年の顔があったのを覚えております。他の人々の顔が全く記憶に残っていないのにY青年だけ覚えていたのも不思議な気がしました。

それから十数年を経て開業した私の診療所に可愛い女の子を連れて訪ねてこられたのが往年の華のような女の患者さんで、結婚されて私と同じ町に住んでおられたのです。私は奇遇を喜びました。その人は可愛い女の子を連れて二・三度訪れられたのでしょうか、それから暫く来診がなく今度はお父さんが連れて来られました。その人があの沢山の見舞客の中の私の記憶に残っていた青年であったのに内心びっくりしました。そして結婚されたのが静かで上品なY青年であったのを心の中で喜びました。

それから暫くしてお父さんが今度は五才くらいの男の子を連れて診察に訪れられ診療が終わった後「独りで子供を見ていると子供が病気をしたときどうしてよいのか途方に暮れます」と言われ理由を尋ねた私の耳に帰ってきたのは奥さんと「別れました」という悲しい言葉でした。二人の幼い子供を抱えたこ

の若いお父さんはこの先どのように過ごしてゆかれるのであろうか、私は男の子の病気について考えるより、この家族の将来を思い心が千々に乱れるのを感じました。そして「私で出来ることなら何でもしますから、お父さん、この可愛い子供達のため、この子達が納得するまで再婚はなさらないで——」と心の中で叫びました。しかし私の口から出た言葉は「病気の時は何時でも電話して下さい、留守でも子供さん達の診療に伺いますから」といったありきたりのものでした。

二人の子供さんが素直に可愛く育て欲しいという私の願いと、お父さんに暫く再婚はされないでほしいと心の中で思った申し訳なさのためこの家族のことは常に私の心のどこかにありました。

数年に一回ほど訪れる子供達の素直な成長を見る度にほっとしたり、喜んだり、心の中でお父さんにお礼を言ったりしておりました。その上の女の子の結婚の知らせです。

Y氏は穏やかな、しかし喜びを込められた言葉で「結婚式はまだ先で、六月の父の日に挙げると言っております。そして彼も父子家庭の息子です」と告げられるのを聞きuちゃんの、そしてその伴侶になられる青年の並々ならぬ父親への思いのほどが感じられ、またお父さんの今日までの苦労の幾山河を思い思わず目頭が熱くなりました。

「よかったですネ」最後におしゃべりの私の口から出た言葉はやっとこれだけでした。

(内科開業医)